

## 第2章 農業の概況

「モ」国の産業は農業と食品加工の比率が高く、1998年の全GDPにおける農業の占める割合は約29%である。全労働人口に占める農業労働人口の割合は約23.7%、耕地面積は全陸地面積の約54.5%を占める。

国土は肥沃で農業に適した黒色土地帯に位置し、かつ温暖な気候であることから麦等の穀物栽培のほか、果物、野菜、テンサイ、葉タバコ等が集約的に栽培されている。特にブドウの栽培が盛んで、その加工品であるワイン等のアルコール飲料が「モ」国最大の輸出品目となっている。

「モ」国における主要食用作物の栽培状況を表2-1に示す。表の示すとおり1997年以降、小麦及びトウモロコシともに生産量が減少している。

作物	項目	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年
小麦	生産量 (t)	784,160	1,345,131	912,990	800,425	770,000
	作付面積 (ha)	380,806	410,172	356,744	341,725	320,000
	単位収量 (t/ha)	2.06	3.28	2.56	2.34	2.41
トウモロコシ	生産量 (t)	1,036,713	1,830,962	1,238,984	1,140,294	1,091,000
	作付面積 (ha)	357,645	457,768	398,114	403,194	420,000
	単位収量 (t/ha)	2.90	4.00	3.11	2.83	2.60

表2-1 主要作物生産状況

(出典：FAOSTAT)

表2-2に小麦及びトウモロコシの単収の世界平均などとの比較を示す。小麦及びトウモロコシともにヨーロッパの平均値を大きく下回ることがやむを得ないと考えられるが、「モ」国は肥沃な土壌や恵まれた自然環境をもつにもかかわらず、トウモロコシについては常に世界平均を下回り、小麦についても1998年以降世界平均値を下回っている。CIS平均に対しては、小麦は常にCIS平均値を上回っているものの、トウモロコシについては2000年にCIS平均をも下回った。

表2-2 小麦及びトウモロコシの単収の比較

作物		1996年	1997年	1998年	1999年	2000年
小麦	世界平均	2.58	2.71	2.69	2.76	2.70
	ヨーロッパ平均	5.88	5.47	6.02	5.70	5.84
	CIS平均	1.45	1.77	1.44	1.70	1.65
	モルドヴァ	2.06	3.28	2.56	2.34	2.41
トウモロコシ	世界平均	4.23	4.14	4.43	4.36	4.23
	ヨーロッパ平均	8.50	9.05	8.71	8.81	8.79
	CIS平均	2.49	3.27	2.45	2.50	2.73
	モルドヴァ	2.90	4.00	3.11	2.83	2.60

(単位：t/ha)

(出典：FAOSTAT)

「モ」国の農業生産の復興を目指す上で最重要課題となるのが農業の機械化であるが、既存の農業機械はその約82%が老朽化して使用できず、また新規更新のための農業機械は資金的な理由から農民には購入できないという状況である。1998年には農業機械不足により約30%もの農地が耕起できないまま冬を迎えるという状況が発生したとも報告されている。表2-3に「モ」国の主要農業機械の保有台数を示す。このように保有台数は年々減少していることが明らかである。

品名	1996年	1997年	1998年	1999年
トラクター	48,000台	46,000台	44,000台	42,132台
コンバイン、脱穀機	6,000台	5,800台	5,600台	5,415台

表2-3 農業機械保有台数

(出典：FAOSTAT)

「モ」国では、独立後の土地私有化によって農地が農民に無償分配された。細分化された耕作地は平均で約1.5haであり、登記簿上は個人所有となっている。しかし、実際の農作業においては、グループ化された集団で耕作を行ったり、個人から耕地を借り受け、作業員を雇って大規模に耕作する形式、個人から農地を買い取って会社形式で耕作するなど多岐に渡る。そのため、小型の農業機械に比べ中型・大型農業機械の必要性が高い。

「モ」国にとって農業機械の普及が重要であることは、輸入に際する関税措置からも窺える。農薬及び肥料にはそれぞれ5%及び20%の付加価値税が課せられているが、農業機械に対しては無税措置がとられている。「モ」国ではトラクター及びその作業機が国内生産されているが、トラクターは非常に古いタイプのモデル(20~30年程度前のクローラタイプ)を未だに製造しており、作業能率、燃費等の性能面から考慮して実用的とは言い難く、故障が多いことなどを理由に農民はほとんど購入意欲を示していない。また、2KRで調達を計画しているリバーシブルプラウについては、1999年より国内で試作・生産を始めたばかりで性能、耐久性についてはこれからの確認事項となっている。